



発達障がいと愛着障がいを見分ける

適切な支援を行うには、双方に共通する行動から「違い」を見つけ、子どもが抱える問題を正しく理解する必要があります。そのためのポイントを、米澤先生の著書から紹介します。

① 多動の現れ方の違い

ADHDの多動は、活動内容や場所・状況が変わっても、好き嫌いやそのときの感情が違って、基本的にいつも多動です。また、**ASD**の多動は、「ここにいる、これをしていれば気分がいい」といった居場所感が、急な予定変更や作業の終了・切り替えの指示によって奪われた（本人の感覚として）ときなどに現れます。

一方、**愛着障がい**の場合は、変わりやすくムラのある感情が原因で、多動にもムラがあります。場所や状況（曜日や時間帯も含む）、活動の好き嫌いの感情が影響し、ネガティブな感情が多くある場合や、ポジティブな感情があり余って興奮状態のとき、ポジティブな感情によるエネルギーを使い果たして枯渇したとき、注目をされたいときに多動となります。

② 片付けができない、ルールが守れないように見える現象

ADHDでは、「片付ける」という一連の行動を最後までやり通す実行機能に困難さがあるため、片付ける行動を細かく分解し、スモールステップで行動支援を行うことが有効です。ルールに関しては、遵守意識はあるものの、衝動性や行動コントロールの問題から結果的に違反行動をしてしまいます。**ASD**では、自分の捉え方、認知と合致しないと絶対に聞き入れないという、**ASD**に特徴的な特性が関係して生じると言えます。

対して**愛着障がい**では、「片付けた方が気持ちがいい」「片付けたい・片付けよう」という感情や意欲が育っていないことが原因であり、今日ではできても翌日はできないなど、積み上がっていく感じがありません。また、ルールを守るとポジティブな感情になることを知らないため、遵守の意欲も育っていません。ネガティブな感情のコントロールが困難な上、逸脱行動は周囲の注目を集められるため、愛情欲求行動として逸脱行動が生じやすくなります。

③ 不適切行動を「取り上げない」「無視する」対応への反応

ADHDでは、不適切行動に対して報酬を与えない、強化しない対応を行うと、その行動は消去されていきます（一時的に行動が増加すること等については、第32・33号参照）。

しかし、**愛着障がい**の不適切行動は感情の問題から生じているため、このような対応は、自分の気持ちを分かってくれないという思いを誘発し、感情を逆なですることになり、さらに注目を集めようと不適切行動を次々とエスカレートさせる結果を生んでしまいます。

④ 集団場面か、1対1場面かによる現れ方の違い

ADHDは他者との関係性の障がいではないため、場面や対人関係、集団か1対1かによる行動の違いはさほどありません。

愛着障がいは特定の人（多くは親）との絆の問題であるため、特定の人（教師等）との関係が意識しにくい集団場面で問題行動が現れやすく、逆に特定の人との1対1場面では現れにくくなります。

実際は発達障がいと愛着障がいと併存しているケースもあり、個々にアプローチの仕方を考える必要がありますが、基本的には愛着の問題に焦点を置いた対応が優先されます。（つづく）



担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392